

なぜ芥川龍之介『羅生門』の 語り手は変化するのか

『物語のレッスン』（土方洋一）

戸水 結心

テーマ設定理由

『羅生門』の語り手は変化する
→何のために？どのような影響を与える？

そもそも「語り手」って？

1章 芥川龍之介

『羅生門』

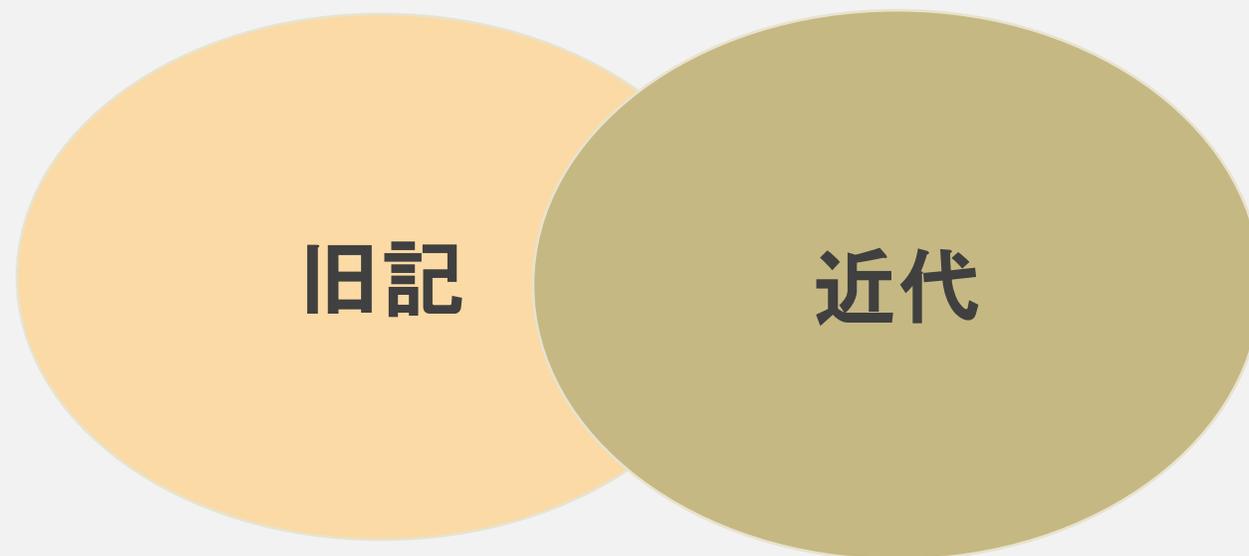
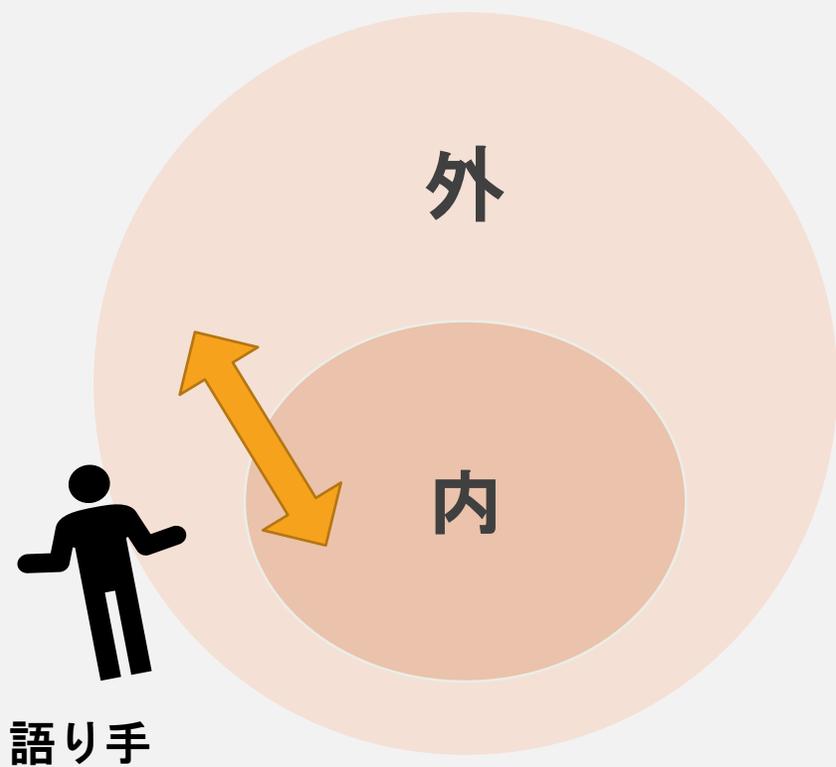
「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつゝあった。」



下人の行方は読者1人1人の
〈読み〉に委ねられた

「下人の行方は誰も知らない」

2章 『羅生門』における語り手とは



2つの異なった世界

3章 語り手の変化について

① 《語り手 > 作中人物》

語り手はどの作中人物が知っているよりも多くのことを語る

= 焦点化ゼロ

② 《語り手 = 作中人物》

語り手はある作中人物が知っていることしか語らない

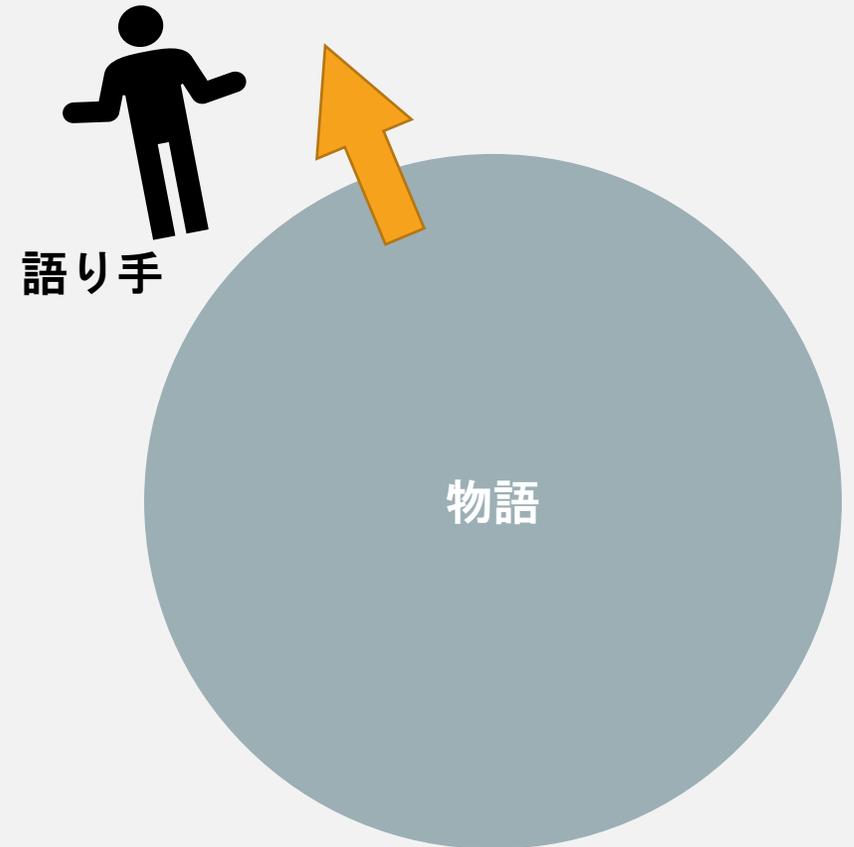
③ 《語り手 < 作中人物》

語り手は知っていることが作中人物よりも少ない

語り手 > 作者、下人

→ 全知視点 = 焦点化ゼロ

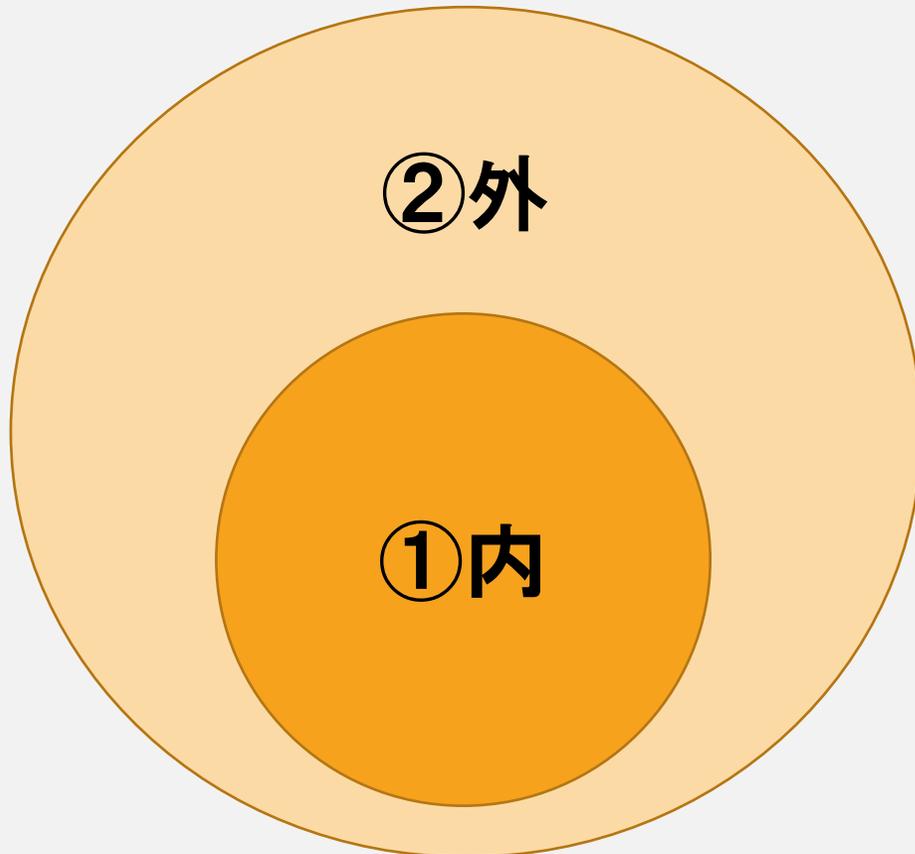
積極的に自己を顕在化する **×**
《語り手 > 作中人物》



対象外!

結論

語り手



- 「私」が語る→一人称の語り
①内側で展開
- 「語り手」が語る→三人称の語り
= 〈全知の語り手〉
②外側で展開

視点を重ねる

→ 作中人物の心理を生き生きと描写できる

作中人物の世界を説明的に聞かせる

読者との**心理的な共感**を狙っている

参考文献

- 関口安義『新潮日本文学アルバム13芥川龍之介』(新潮社、1983)
- 鷺只雄『年表作家絵本 芥川龍之介』(河出書房新社、2017)
- 関口安義『よみがえる芥川龍之介』(日本放送出版協会、2006)
- 関口安義『「羅生門」を読む』(三省堂、1992)
- 芥川龍之介『羅生門・鼻』(新潮社、1968)
- 山本雅子「物語論における人称の意味 認知的談話構築の観点から」『言語と文化55巻28号』(愛知大学語学教育研究室、2013)
- 江藤茂博「芥川龍之助「羅生門」論:「語り手」の優位性と重層的テキスト空間」『日本文学43巻1号』(日本文学協会、1994年)
- 早澤正人『芥川龍之介論-初期テクストの構造分析-』(鼎書房、2018)
- 劉芳「語り手と「他」と訳された「この男」:物語言説の分析を方法に」『翻訳研究への招待14号』(日本通訳翻訳学会、2015)